

## 第92回麻布獣医学会 一般学術演題16

## 乳牛の難産発生率と子牛生存率の調査

○北山 しおり, 原田 宗範, 内山 史一, 坂和 由紀, 磯 日出夫

磯動物病院

【背景】近年、家畜市場での子牛の価格が高騰している。実際に農場では新生子をより安全で健康に取得するために畜主は分娩に立ち合い、異常があれば獣医師に依頼する気運が高まっている。その理由として、生まれてくる子牛は受精卵移植された黒毛和種、1代交雑種および性選別精液による雌ホルスタインが増加し、優良牛としての子牛販売と後継牛確保による経済的価値を考慮した経営に変化していることによるものである。また、難産が一度発生すると子牛の生存を脅かすだけでなく母牛の体力損耗の大きい疾患であり、継発する周産期疾患による経済的損失および畜主の精神的負担も大きい。しかし、その処置法や救命率の向上に関しての報告は見当たらない。

【目的】日常診療依頼の中で難産は緊急性が高く、昼夜問わず依頼され、獣医師の負担の大きい疾患である。実際に胎子失位もなく、子牛サイズが小さくとも分娩介助を依頼されることが増えている。畜主および獣医師による分娩介助の中には難産でないものも少なくない。よって、現場での分娩時の介助する割合、難産の発生率および子牛の生死について調査することは意義深く、分娩時の詳細な調査は真の難産の処置法の啓蒙と農家での分娩事故低減に繋がるものと考え試験した。

【方法】調査対象は那須塩原市内の繁殖記録を完備しているホルスタイン種飼養5農家(総飼養頭数347)の繁殖記録、分娩状況記載、聞き取りおよび難産依頼された診療カルテで行った。調査項目は自然分娩、分娩介助の有無、難産介助の有無、分娩時の胎子の体位、新生子の大きさおよび生死について調査した。調査期間は平成28年1月～29年6月の18か月間行った。

【結果】調査した農家での総分娩頭数566であり、自然分娩414頭73.1%、分娩介助152頭であり、分娩介助率は農家それぞれ35.6%、14.3%、25.5%、31.3%、29.7%であり平均で26.9%であった。介助した割合は畜主20.1%、獣医師6.7%であった。介助理由として、畜主側の人員不足、優良子牛の安全確保および分娩介助処置時間の短縮などの理由が含まれていた。実際に難産介助が不必要と判断されたものは68.4%((152-48)/152)であった。また、真の難産は48頭で、それぞれ10.3%、7.1%、12.8%、9.0%、8.1%であり平均で8.5%であった。子牛死亡は65頭11.0%であり、その割合は自然分娩14頭21.5%、畜主介助16頭24.6%、獣医師介助35頭53.8%であった。双胎は23頭4.1%であった。

【考察】従来のホルスタイン農場での難産の発生率は9%との報告があるが、今回の成績8.5%は同等の成績であった。難産は胎子失位および過大子の場合が多いが、陣痛微弱も難産とされる。しかし分娩介助処置時間の短縮のために牽引しても、家畜共済事故対象の陣痛微弱とすることが少なくない。今回分娩介助が不必要と判断されたものは31.6%あり、獣医師による指導不足があるものと考えられた。よって、今後人工授精にホルスタイン雌性選別精液、黒毛和種精液および黒毛和種雄性選別精液が使用され、ETではホルスタイン雌性判別胚、黒毛和種体内胚、黒毛和種IVF胚などの増加が予想されるので、畜主による積極的な内診方法を含めた獣医師による分娩管理のさらなる指導の必要性があると考えられた。また、難産率については胎児側、母体側および畜主の都合など多くの因子があるので、さらなる詳細な調査が必要であると考えられた。